

武庫川づくりサイエンスコンシルより「住民主体の武庫川づくり」の現場から

木村公之・古武家善成・辰登志男・土谷厚子・亀井敏子・
佐々木礼子・法西浩・山本義和・吉田博昭

はじめに

「武庫川づくりサイエンスコンシル」とは、「第2回 武庫川づくり水質フォーラム ～シンボルフィッシュアユが棲める水環境をめざして」から得た3つの提言を基に、流域住民が主体となる川づくりにおいて、行政・専門家・流域住民の3者が一体となった小さな武庫川づくりの実践をめざして令和元年度にスタートした武庫川づくり戦略協議会である。そこで武庫川講座から派生した武庫川守が主体となり、「天然アユ遡上復活を目指すアユの生態調査」「流域圏および河川環境・景観保全再生(景観ストックデータ作成)調査」「水辺の小さな武庫川づくり実践」の3つの専門部会に分化し、それぞれのステージで実践している武庫川づくりにおける1年間の成果について取りまとめた。

3つの課題と取り組み

1. 水辺の小さな武庫川づくり実践グループ

佐々木礼子・法西浩・山本義和・吉田博昭

活動概要

仁川合流付近は都市の貴重な自然空間であり、アユをはじめ多様な生きものが健全に育むことのできる下流のオアシスである。このゾーンをモデルゾーンに選定し、5つの課題に取り組んだ。

- ① 水路づくり
- ② ゴミ漂着抑止
- ③ 環境モニタリング
- ④ 川の駅づくり
- ⑤ 川の魅力発信



成果とまとめ

川づくりは相手が自然であることから、一度に大勢を集めて実践する一過性の取り組みでは目標達成は困難である。そこで、武庫川守の誰かが時間の許す範囲で細々とスコップや鍬・ノコギリなどの身近な道具だけを使用し、絶え間なく続く水の流れなどの自然力を利用した作業をはじめた。その結果、少し手を加えただけで、少しずつ何かが変わり作業の効果は直ぐに結果として現れ、手応えを感じる事ができた。このゾーンには行政も着目し、毎年「みんなで取り組む武庫川づくり」を企画する市民と行政が自然空間で触れあう場でもある。行政による重機を使用した河床掘削などを「大技」とすると、市民の川づくりは「小技」である。これらの技の連携と集積によって少しずつ成果が現れ、コロナ禍の憩いの場として、あるいは幼稚園児の遠足先に選定されている。



天然アユ遡上復活を目指すアユの生態調査(武庫川発掘研究)グループ

木村公之・古武家善成

活動概要

昨年度(2019年度)実施したアユ遡上観察調査では、アユの魚影を見つけることができなかった。他流域における河川の事例でも、「近年、日本海側の全国の川で深刻化している遡上アユの減少が、由良川にも及んでいる。」などの新聞情報が掲載されていた。

兵庫県の内水面漁業統計データ」と「県のモニタリングデータ」を用いて、地理的に隣接している武庫川と猪名川両河川の水質と漁獲量の違いを統計解析した。水質的には猪名川の方が明らかに悪いのにアユの遡上量は猪名川の方が多かった。なぜアユの漁獲量が猪名川で多いかについては不明。



2020年の夏に試験釣り実施(左写真)。僅かな捕獲数ではあるが、稚魚の放流位置より相当下流の宝塚新橋付近まで天然アユが遡上していることが確認できた。

まとめと今後の方向性

撤去が検討されている下流部潮止め堰がアユの遡上を阻害していると考えられることから、今後は撤去による塩水遡上の状況やアユの移動を含む堰の環境影響について注目したい。

2. 流域圏および河川環境・景観保全再生(景観ストックデータ作成)調査グループ

土谷厚子・辰登志男

活動概要

川が本来もつ営みの下に、地域の暮らしや歴史、文化との調和にも配慮し、その川に元から生息する生きものや植物を保護しながら川の工事を実施し、あるいは生きものの個体数が減った所は回復するような施工をするなど、さまざまな河川環境を創出することで景観が守られているかを調査するために写真撮影を実施した。判断の出発点になる施工前、工事中は環境に配慮した工法がとられているか、施工後市民がどのように接しているのかなど、多様な視点から各所の撮影を続けた。

その結果、丁寧な工事が行われていると感動する所もあるが、環境への配慮が足りないと思われる所もある。工事前の説明会の段階で、地元住民だけでなく、川づくりまちづくりに関心のある市民も参加して意見を出し合うようにすれば、環境に配慮した工事がより多く行われるのではないかと思った。

今回の調査で景観を記録しておくことの重要性を再認識した。

